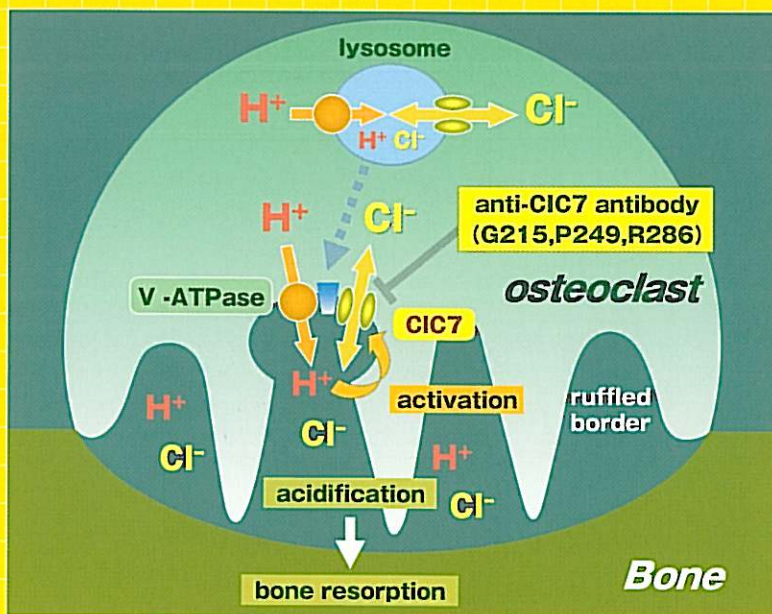


# 日本歯科評論 6

THE NIPPON DENTAL REVIEW

June 2011 No.824 Vol.71(6)



福岡歯科大学 細胞分子生物学講座 細胞生理学分野  
鍛治屋 浩先生・岡本富士雄先生・岡部幸司先生 <私の研究室から>本文9頁

〈特集〉

## 1つ上を目指す歯内療法へのアプローチ

牛窪敏博・加藤広之・勝海一郎・木ノ本喜史・寺内吉継

Point of View <対談>いざ、「評」して「論」ずる

“予知性”の高い治療とは何か？

二階堂雅彦・土屋賢司

新シリーズ “生きた臨床”を学ぶ

患者さんに「No」と言われたら？——EBMとNBMの着地点

堤 春比古

“DH”あなたの出番です！

「ブラッシング」って本当にすごい！ だれにでも やさしく たのしく

——診療室, 地域から, 親子へ伝えたい

関 律子・浜野弘規

HYORON

<http://www.hyoron.co.jp>

# オリンピックは金・銀・銅、 大相撲は優勝のみ

なかはら えつ お  
中原 悦夫

医療法人社団協立歯科 クリニック デュボワ  
〒100-0011 東京都千代田区内幸町1-1-1 帝国ホテルプラザ4階



一昨年の事業仕分けでの蓮舫議員の「世界一になる理由は何があるんでしょうか?」「2位じゃダメなんですか?」という発言は、各界に大きな波紋を呼んだ。真っ先に反応したのは科学界である。スポーツ界も反応した。その後、ノーベル化学賞を受賞した鈴木 章・北海道大学名誉教授も「研究は1番でないといけない。『2位ではどうか』などというのは愚問」と、バッサリ切り捨てた。

一方、蓮舫議員本人から、なぜあのような質問をしたのかを直接聞く機会があった。彼女は「当然、1番じゃなければダメです。2位じゃダメです」と断言したうえで、公開事業仕分けの席で「1番である重要性」を明確にもらえることを期待していたが、相手からはっきりとした回答が返ってこなかったのであとの質問をぶつけた、というのが実情らしい。例の言葉だけが独り歩きを始めてしまったわけだ。

## 「世界一になる理由は 何があるんでしょうか?」

私たちの存在は、各々、生まれてくる前に1億から4億の精子がアスリートとして卵子を求める激しい競争を経た結果である。当然、1番に受精した精子のみが優勝し、2番以下は新たな生命としての日の目を見ない。生命として誕生するのは「1番」だけなのである。

角界も同じである。優勝しもなく、準優勝すらない。やはり神事でもある日本の国技「大相撲」は、生命の神秘を思い起こすにふさわしい。1番でなければ形もなさず、評価もされない。このことが多くの日本人の心の中に潜在的に織り込まれていて、そもそも「2番」という概念はなかったのかもしれない。「世界に一つだけの花」という歌詞が日本人の心を捉えるのも、「あなただけ」「君だけ」が殺し文句になるのも、心の奥にはみんな「1番」や「1

位」が存在しているからであろう。

西洋でも「ONE & ONLY」という言葉を見かける。これは「1番」というよりは「本当の、正真正銘の、真の」という意味合いのほうが濃い。

一方、ギリシャに起源を發し西洋を代表するスポーツの祭典「オリンピック」の場合は、金、銀、銅が、つまり1番、2番、3番が表彰され、それぞれの榮譽がたたえられる。

ゴルフトーナメントでは出場者全員に順位が付き、美人コンテストであるミスユニバースでも同様に優勝、準優勝、3位以下……と、ずっと順位が付いてまわる。学校の試験の成績や学力テストでも当然順位が付きまとう。

1番とはいったい何だろうか?ましてや1番になる理由を聞かれても、答えるのは本当に難しい。

## 「2位じゃ ダメなんですか?」

幼児期には何をするにもいつも



「イチバン!」と言って1番でいることに喜びを感じ、2番以下は受け入れられないわが子を微笑ましく思えた。1番でいることにフォーカスした心地よさを、幼心にも本能的に感じ取っていたのであろう。しかし、そのうち2番や3番を覚え、だんだんと闘争心が薄れて、普通の子供になっていく。

ワールドミスユニバース世界大会の最終審査の発表では、優勝者の発表より先に準優勝者が発表される。書類選考、各地のオーディション、そして各国の本戦を勝ち抜き、ついに臨んだ世界大会の最終審査発表で、残された最後の2人を発表する瞬間である。先に名前を呼ばれたら準優勝で、それは敗北を意味する。

誰よりも努力を重ね、あと一人負けかせばミスワールドになり人生が一変する瞬間だが、ここでの“2番”とは、“最後に負けて一番悔しい思いをすること”である。途中のオーディションで敗戦していく悔しさとは質もレベルも違う。あと一歩で届

く期待に満ち溢れた瞬間に訪れる、何よりも残酷な告知である。しかも次の瞬間には、拍手喝采の中、負けた悔しさを押し殺しながら笑顔でステージの前に行かなければならない。これが準優勝、2番の本質である。アスリートの宿命であり、主観的論理である。

このように1番と2番の差は、2番と3番以下の順位の間との差とはまったく異なる。2番でよいのなら何番でも同じであり、1番以外はその他大勢なのである。とはいっても、世界大会に出場できただけでも誇るべきことであり、準優勝も優勝も拍手喝采の賞賛に値する。

オリンピックでは金・銀・銅がメダリストとして賞賛されるが、上位入賞も賞賛すべき価値がある。もっとも、これらは競技に参加していない観客側の客観的論理ではある。

\*

幼児期の子供にとって「イチバン!」は本能的な喜びである。だから1番になれなかったとき、あの小

さな胸にふりかかる悲しみは大人には計り知れない。だから、客観的立場の親、幼稚園の先生、お教室の先生は2番を褒め、3番を褒め、何番であってもその努力をたたえる。大事なことではある。ただ、いつの間にか「1番でなくても2番や3番でもいい、褒められるのであれば」と思うようになるのが残念だ。

歯科医療において、われわれは細菌や患者の病理と戦っている。勝つか負けるかであり、優勝のみである。結果に順位はない。しかし、「銀でもいいではないか」「銅で十分」と客体化して語るうちに、いつの間にか「よくやった」「患者が感謝しているからいいではないか」と、優勝以外の高順位に甘んじてしまう。あるいは「保険診療だからしょうがない」などと、医療の本質を制度の問題にすげ替えてしまうのが残念だ。

日本人は優勝し続ける横綱に品格を重ね合わせる。われわれの医療も目指すは横綱である。